19年国産材丸太輸出年間15万㎥へ

地域業者と連携で集材強化

瀬崎林業

瀬崎林業（大阪市、瀬崎民治社長）は2019年の国産材丸太輸出事業について、年間輸出量15万立方㍍を目指す考えを示した。18年は約12万3000立方㍍輸出しており、数量の増加を見込んでいる。

同社の国産材輸出は杉を中心に、中国や台湾に供給している。取扱数量の約8割を占める中国向けの輸出拠点は、九州5港。地元の港湾業者や林産業者との連携体制も確立されている。

合板メーカーやバイオマス関連事業者との競合が激化する素材集荷に関して同社は、九州の地域森林組合、素材生産者、行政とタイアップすることで独自の調達ルートを構築。安定した集荷を実現している。九州の地元林産事業者及び行政関係者を巻き込んだ研修会も立ち上げ、国産材輸出への理解深化にも努める。

川上にさかのぼっていく仕入れ体制により、取扱量を増大させる計画だ。

最大輸出先である中国市場は、米中関税問題に起因する市況の不透明さは否めないものの、杉需要に関しては内需向けを主として堅調だ。中国需要家は積極的に杉を仕入れる姿勢を保っており、輸出価格は上げ基調が続いている。

同社の中国取引先は、小径木だけでなく40㌢上の大径材も欲しており、同社は九州内の調達ルートを強化することで、中国需要へのきめ細かい対応力を高める。

同社の国産材輸出事業は10年に始まり、17年に年間輸出量10万立方㍍を突破。年々取扱量を増やしている。